

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19730238
 研究課題名（和文）19世紀前半期インド域内市場の変容と植民地化 東部インド塩市場を中心に
 研究課題名（英文）Colonization and Changes in the Market in Early Nineteenth-Century India, with Special Reference to the Salt Market in Eastern India
 研究代表者
 神田 さやこ（KANDA SAYAKO）
 慶應義塾大学・経済学部・准教授
 研究者番号：00296732

研究成果の概要（和文）：19世紀半ばの東部インド塩市場では、在来のベンガル塩がチェシア塩にとってかわられるという大きな変容が生じた。本研究では、東部インド塩市場の変容が、イギリス東インド会社統治（塩独占制度）およびイギリス製塩業・海運利害の強力な圧力によってのみ引き起されたのではなく、現地の文化、生態環境、経済といった複合的要因（とくに嗜好、燃料市場、商家経営）が塩種間の競争と淘汰をもたらした結果生じたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Cheshire salt, which was imported from Britain, had become dominant in the Eastern Indian market by the mid-nineteenth century. This project explored that this transformation in the market was brought about not only by the British East India Company's salt monopoly and the strong pressure from British industrial and shipping interests, but also by severe competition among different varieties of salt, which was generated by indigenous economic, cultural and ecological factors, including mercantile activities, consumers' taste, and the availability of fuel.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	0	1,400,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	540,000	3,740,000

研究分野：インド経済史

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：インド、イギリス東インド会社、アジア経済史、嗜好、製塩業、燃料市場、チェシア塩

1. 研究開始当初の背景

本研究開始の背景として、インド経済史研究における以下の二つの問題があげられる。

(1)19世紀前半期のインド経済の変容は、植民地化と一次産品生産を通じた世界市場への統合という外的要因や、ヨーロッパとの比較によるアジアの「後進性」によって説明さ

れてきた。したがって、「脱工業化」や国富流出による資本形成の失敗、イギリス東インド会社統治による政治的、経済的従属の開始が、この時期のインド経済の特徴とされ、多くの研究がイギリス統治との関係、貿易のインパクトを議論の軸においてきたのである。

しかし、こうした議論は、19世紀後半以降のインドの政治、経済構造を前提として19世紀前半期の経済をみており、19世紀前半期の実証研究には必ずしも基づいていない。したがって、インドは単なる変容の受け手として固定化されてしまい、インド経済、社会内部からの変化や工業化・経済発展を視野にいれた長期的議論をおこなうことができないのである。

(2) 一方で、1980年代以降、「(長期の)18世紀」研究が活発におこなわれ、ムガル帝国の弱体化に伴う政治的、経済的衰退の時代から、地方国家の下での政治的安定と経済的繁栄の時代とみなされるようになった。この特徴は1830年頃まで続くと推測され、南アジアの発展の内的要因が強調されている。この議論では、イギリス東インド会社国家の誕生も南アジアの内的発展の延長線上に位置づけられている。

「18世紀」インドのダイナミックな変化が強調される一方で、イギリスへの政治的、経済的従属が顕著となった19世紀半ば以降の時期との間に挟まれた19世紀前半期は、経済的停滞と不況を特徴とする「過渡期」とみなされ、積極的な研究の対象にはなっていない。しかし、この「過渡期」は植民地化が進行した時期であり、この時期を実証的に検討しなければ、18世紀インドのダイナミックな変化がどのように終わったのか、それがどのように19世紀後半の変化と結びついていたのかを明らかにし、植民地化と現地社会・経済との相互作用を理解することは不可能であろう。

2. 研究の目的

以上の問題意識をふまえ、本研究の目的は、インド史研究における19世紀前半期の経済史的意義および植民地期インド経済のダイナミズムを明らかにすることである。本研究では、19世紀前半期における東部インド塩市場という域内市場をとりあげ、その構造と変容に関する実証的検討を通じて、この問題に接近した。

この時期に関する研究の多くは、カルカッタやマドラスなどの都市や輸用作物生産地域、それに関係する商人層・生産者、土地制度の変容を中心に、植民地化や対外貿易のインパクトを議論してきた。しかしながら、

内陸部では貿易のインパクトは依然として限定的であり、対外市場と結びついた都市や生産地域の議論をインドに一般化して議論することは難しい。市場の変化は、外的要因によってもものみもたらされるものではなく、取引制度、文化、生態環境などその地域の内的要因にも大きな影響を受ける。したがって、市場の変容の要因を多面的に検討することによって、この時期のインド経済を動態として捉えることが可能なのである。

本研究が対象とする東部インド塩市場では、1850年頃からのイギリス・チェンナイ塩が大半をしめるようになった。こうして、塩は綿布と並んで植民地支配の象徴となったのである。従来の研究では、イギリス東インド会社の政策(塩独占制度)およびイギリス製塩業・海運利害の強さが在来製塩業を破壊し、市場からベンガル塩を駆逐したと議論してきた。本研究では、この変容が19世紀半ばに起こった劇的な変化ではなく、19世紀前半期を通じて段階的にもたらされたことを明らかにするために、外的要因だけでなく、内的要因、具体的には、嗜好、地域間競争、燃料市場、商家経営から検証した。

3. 研究の方法

(1) 上記の目的を達成するために最も重要な方法が、資料および統計データを収集し、その分析をおこなうことである。

カルカッタの対外塩貿易(民間およびイギリス東インド会社勘定)、東部インドにおける塩生産量、市場への供給量、塩の種類別供給量、地域別供給量等の統計データを利用して、市場の変容の数量的検討をおこなった。これは、本研究の基礎研究となる。

数量的にみた市場の変容の要因を明らかにするために、市場の変容に多大な影響を与えたと考えられるイギリス東インド会社の政策、商人の活動、製塩業をとりまく環境(とくに燃料調達問題)、チェンナイ製塩業の市場開拓に関する分析をおこなった。

(2) 主な資料は以下の通りである。

在ロンドン英国図書館および在コルカタ西ベンガル州立文書館、在ダカバングラデシュ国立文書館所蔵のイギリス東インド会社文書(とくに、Bengal Board of Revenue Miscellaneous Proceedings, Salt; Bengal Revenue Consultations (Salt, Opium and c.), Salt; Bengal Board of Trade Proceedings; Bengal Steam Proceedings; Controllers of Salt Chauki Reports)。

コルカタ高等裁判所文書室所蔵の裁判文書(塩商人に関するもの)。

(3)分析した結果は、ディスカッション・ペーパーおよび国内外での学会、研究会での報告という形で積極的に発表し、意見交換やフィードバックを得る機会をもうけた。

4. 研究成果

成果の概要は以下の通りである。

これまでのインド経済史研究では、インド経済の変容は、インドとイギリス、ベンガル塩とチェシア塩、イギリス産業利害（自由貿易）と東インド会社（独占）に代表される二項対立の構図のなかで議論されてきた。こうした二項対立の議論では、インドは19世紀前半期の世界経済の構造が大きく変化するなかで、受動的な存在としてしか位置づけることができず、インド経済がもつダイナミズムを理解することができなかった。本研究は、東部インド塩市場の変容を事例として、変容の要因を東部インドの内的要因およびアジア域内交易（環ベンガル湾交易）という視点を取り入れることによって、従来の研究の問題点を克服した。

東部インドでは煎熬塩であるベンガル塩が好まれた。しかし、燃料多消費型である煎熬塩生産は、河川浸食および耕地面積の拡大による燃料供給地の減少、1820年代後半以降の蒸気船導入および燃料消費産業の発展に起因した燃料市場の逼迫によって高コスト化した。そのため、チェシア塩流入以前に安価な南インド塩（天日塩）との競争で、ベンガル塩市場は縮小していたのである。チェシア塩はこうした塩種間競争の中に参入した。東部インド市場では、南インド産天日塩よりもベンガル塩と同じ煎熬塩であるチェシア塩が広く受け入れられた。すなわち、チェシア塩の競争を有利にした背景には、社会に深く根ざした嗜好と産業をとりまく環境問題が存在した。また、域内市場に関する情報を掌握し広域の流通網を構築していた地方商人の活動によって、チェシア塩が煎熬塩不足地域に急速に持込まれるようになったのである。

具体的な成果は以下の通りである。

(1)第一に、塩の種類を明確に分類することによって、ベンガル塩とチェシア塩の対立という単純な構図ではなく、チェシア塩流入以前から塩種間の競争があったことが明らかになった。とくに重要な塩は、南インド産天日塩であった。貿易統計には記載されていないので、東部インドと環ベンガル湾岸地域との交易関係はこれまで知られていなかったが、18世紀末以降、近隣地域から東インド会社勘定で輸入された塩が流通していた。その量は、1820年代になると増加し、全流通量の

約四分の一をしめていた。

産地別だけではなく、種類別にも異なる市場が存在した。主なものは二種類で、ベンガル塩が、燃料（草や藁）を使って鹹水を煮沸する煎熬塩であるのに対して、南インド塩は天日塩であった。市場では煎熬塩が選好されたので、天日塩の市場は、ビハールをはじめとする内陸部市場に限定されていたが、ベンガル製塩業の衰退に伴って、低廉な価格を武器に市場を拡大させた。

東部インド経済は、南インドを中心とする環ベンガル湾地域との強い貿易関係を維持しており、それが東部インド市場における地域間競争を活発にし、市場に多大な影響を及ぼしていたのである。

(2)第二に、ベンガル製塩業の衰退要因として、燃料問題があげられる。燃料多消費型の煎熬塩生産は、1830年代になると燃料調達問題に直面した。製塩業者は、荒蕪地や収穫後の田畑における藁・草採集に関する慣習的な権利をもっていたが、河川浸食や耕地面積の拡大による荒蕪地の減少と都市部における燃料用、建築用藁の需要増加は、燃料価格の高騰をまねいたのみならず、在来産業における燃料の市場への依存度を高めた。さらに、1820年代末以降、蒸気船導入によって石炭市場が形成されたが、深刻な供給不足によって薪炭、藁を含む在来燃料市場の逼迫をもたらした。燃料価格の高騰によって高コスト化した製塩業では、1830年代半ば以降、不採算の塩田の整理統合が進み、チェシア塩流入以前に生産規模は漸次縮小していたのである。

(3)第三は、1840年代半ばにおけるチェシア塩流入問題である。東部インドに輸入されたチェシア塩は、これまで考えられてきたような岩塩ではなく、市場で好まれるベンガル塩と同タイプの煎熬塩であった。アメリカおよびドイツにおける製塩業の発展によって海外市場をアジア、アフリカへ模索しはじめたチェシア塩業にとって、東部インドは重要な市場と位置づけられた。しかし、チェシア塩が何の抵抗もなく受け入れられたわけではなく、岩塩市場の開拓には失敗した。煎熬塩輸入に切り替えたからこそ、ベンガル塩の代替品として、とくにベンガル塩選好が強い地域（東部ベンガル）で需要されたのである。

(4)こうした需要開拓の背景には現地商人による塩種別のマーケティングが存在していた。地方市場を拠点にした商人層は、地域別の嗜好に関する情報を把握し、広い流通ネットワークを通じて塩市場を掌握していた。本研究では、ダカ近郊バリアティのシャハ家、フォリドブルのシャハ家、およびラナガートのパル・チョウドゥリ家を事例に塩商家の経

営分析をおこなった。1830年代初頭の不況以降、イギリス系商社とパートナーを組みビジネスをおこなっていたカルカッタ商人の多くが没落するなかで、地方商人は、情報と流通ネットワークを活用して域内市場のなかで成長していった。

(5)今後の課題として以下の二点があげられる。

東部インド塩市場が特殊な事例ではなく、インド経済の動態を示す典型的な事例であることを実証するためには、塩以外の事例研究や他地域との比較研究を通じて、議論の一般化の可能性をさぐる必要がある。そのためには、個人研究に加えて国際共同研究を含む研究の組織化が必要となる。

インドの経済発展を長期的な視点から捉えるためには、本研究の成果と19世紀後半以降のインドの工業化をどう関係づけるかが依然として残された課題である。カルカッタやボンベイをはじめとする大都市や南インド、西インドにおける在来産業の発展については研究が進んでいるものの、東部インドの地方工業化、在来産業に関する研究は少ない。本研究でとりあげた商家をはじめ同時期に地方市場で成長した商家が東部インド経済のなかでどのような役割を担ったのであろうか。商家の活動を手がかりに研究を進めていきたい。

なお、代表的な研究成果は以下の通りである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

Sayako Kanda, Environmental Changes, the Emergence of a Fuel Market, and the Working Conditions of Salt Makers in Bengal, c. 1780-1845, International Review of Social History, Supplement 18, 2010, 査読有(掲載決定)

〔学会発表〕(計4件)

Sayako Kanda, Fuel Crisis and Conditions of Salt Workers in Early Nineteenth Century Bengal, the 15th World Economic History Congress, 2009年8月6日, ユトレヒト大学

Sayako Kanda, Taste, Merchants and the Expansion of Global Trade: Competition and Changes in the Salt Market in Eastern India, c.1820-1860, the 15th World Economic History Congress, 2009年8月5日, ユトレヒト大学

神田さやこ, 私的取引制度の機能と変化: 18世紀末~19世紀前半東部インドにおける塩取引と東インド会社, 社会経済史学会第76回全国大会, 2007年5月27日, 創価大学

〔図書〕(計1件)

籠谷直人・脇村孝平, 編, 世界思想社, 帝国とアジア・ネットワーク: 長期の19世紀, 2009年, 神田さやこ 216-249頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

神田 さやこ (KANDA SAYAKO)
慶應義塾大学・経済学部・准教授
研究者番号: 00296732